

## グローバリゼーションとは何か

伊豫谷登士翁(一橋大学)

現代という時代を表現する言葉としての「グローバリゼーション」は、企業のキャッチコピーから学術用語まで、幅広い分野で多義的に使われてきた。現代世界が抱えるさまざまな課題、たとえば、平和と戦争、環境、貧困と開発などが、しばしば「グローバリゼーション」という言葉で論じられてきた。しかしこの言葉は、必ずしも問題の理解を深めるのではなく、むしろ曖昧にしてきたのではないだろうか。わたしたちは、複雑な問題がグローバリゼーションの一言で理解できたかのように錯覚させられる。それゆえ、グローバリゼーションという語は、人を惑わす「バズワード」である、と批判されてきた。

しかし他方では、グローバリゼーションという問題を立てたことによって、これまで見過ごされてきた課題が浮かび上がってくる。たとえば、「グローバリゼーションとアジア」という課題の設定は、これまで自明とされてきた「地域としてのアジア」あるいは「西洋(WEST)対アジア」といった二項対立的観点の再検討の必要性を認識させてきた。「ジェンダーとグローバル化」という問題の立て方は、グローバリゼーション研究のジェンダー・バイアスを、そしてジェンダー研究のナショナルな制約を、各々明らかにするであろう。グローバリゼーションという語は、現代という時代が抱える課題を映し出す鑑としての役割を果たしているのである。

これまでである一定の文脈から論じられてきた課題が、グローバルな課題として捉え返される。グローバリゼーションを学ぶということは、私たちが学んできた社会科学や人文科学がいかにナショナルな枠に囚われてきたのかを自覚することであり、新しい観点と方法を探る試みである、とすることができる。沖縄をめぐる諸問題もその一つであろう。

沖縄がグローバルな政治や経済あるいは文化の接点にあったことは、そして現在においてもグローバルな課題の結節点(node)であることは、あらためて指摘するまでもない。沖縄は、グローバリゼーションにおける場所という課題を考える上できわめて重要である。ヴァーチャル・リアリティといわれるグローバル空間(space)は、具体的な場によって制約されざるをえない。沖縄という場が、日本においてグローバリゼーションを考えるうえで、そしてグローバル資本の空間の統合に対する対抗の場を考えるうえで、もっとも緊急な場所なのである。今日は、「沖縄」そのものについて論じるわけではないが、沖縄という場で

グローバリゼーションを考えるとということがどういうことであるのかということ念頭におきながら、話を進めることにしたい。

巨大企業の世界的な統合化、一日数兆ドルの金融取引、民営化や規制緩和という市場主義（ネオリベラリズム）の政治、政治と法のグローバル化、グローバル・カルチャーと共通経験の共有、グローバル・メディアの支配、あるいは反グローバリズムの運動など、トランス・ナショナルな事象が、地球上のさまざまな局面を特徴づけている。あらゆる課題がグローバルな課題として現れ、一国だけで、さらには国家を単位としては解決不可能となってきた。あるいは「グローバルではない課題」があるのか、と問うてみるとよい。

グローバリゼーションは、たんに経済の話だけではなく、政治・法・文化・社会などあらゆる領域がグローバル化され、相互に密接に絡み合ってきている。グローバリゼーションは、諸事象がナショナルな境界を越えて現れ、個々別々の事象と考えられてきた諸事象が領域の境界を越えて現れることをも意味するのである。

環境、紛争、貧困などのビッグ・イシューだけがグローバルな課題ではない。地方の小さな村での出来事がグローバルな課題と結びついている。また世界で起こっていることが地方の村に影響を及ぼす。ここで重要なことは、グローバルな課題とそうでない課題があるのではなく、課題をグローバルに捉える、ということである。言い換えるならば、グローバリゼーション研究とは、諸事象の捉え方、方法の問題を含まざるをえないのである。

あらゆる出来事がグローバルな課題として現れるということは、すべての人々がグローバリゼーション時代に生きているということであり、グローバルな世界の外に「外部」が無くなったということである。人々には、もはやグローバリゼーションから免れる場は残されていない。すべての人々はグローバルな空間のなかに絡め取られており、そこから抜け出る場所は残されていない。

グローバリゼーションは、しばしば統合化と均質化した空間を生み出してきたと言われる。巨大企業の製品は世界の至る所で見かける。一国の政治が世界を支配する。世界の若者がジーンズをはき、T シャツを着て、マクドナルドを食べる。世界の大都市は同じような景観を呈してきており、そこで働くエリートたちの制服は、統一したブランドである。

しかしグローバル化は、地球上のあらゆる地域が同じようになるということではない。かつて発展途上国と呼ばれた地域を含めた統合化が進展するなかで、個々の地域の分断化が進められるのである。マンハッタンのアッパー・イーストサイドにあるペントハウスの

住民は、東京やシンガポールなどの世界都市の同じような地域に住む人々とは、日常的に情報を交換し、同じような価値観を共有する。しかし、ほんの1・2ブロック先に住む人々は、ペントハウスの清掃やビルのメンテナンスの仕事をしているが、その住民との共通性はほとんどない。均質な空間の創出は、世代や階層、地域の分化を引き起こしてきた。統合と分断、均質化と差別化は、同じ過程のメダルの表と裏なのである。

統合化と均質化を推し進めてきたのは、福祉国家という体制であった。グローバリゼーションは、この福祉国家体制の崩壊として現れてきている。第二次世界大戦後の先進諸国における福祉国家政策は、すべての人々を底辺から包摂して国民化を徹底する過程であった。しかし新自由主義(ネオ・リベラリズム)は、国民を再定義しつつ、包摂しながら排除される人々を生み出してきた。包摂(inclusion)と排除(exclusion)は、相対立する概念ではなく、同じ政策体系の中に組み込まれている。統合(unite)は分離(divide)と平行して進行し、越境化と分断化が同時に引き越される。ここで起こっていることは、グローバルな空間を生きる人々と、ローカルに固定される人々との分断である。

グローバリゼーションは、しばしば速度／早さをめぐる競争だといわれるが、場所をめぐる闘争でもある。世界都市とは、最新の通信や輸送手段によって結びつけられた単一の空間であるが、そこには世界都市を支える底辺の仕事を担いながらも、情報から取り残された膨大な人々がいる。グローバリゼーションは、空間的には統合しながらも、具体的な場を分断する。グローバリゼーションを論じる場合に、ヴァーチャルな空間での統合化とともに、具体的な場所においていかなる分断や亀裂が引き起こされているのか、問うことが必要になる。

具体的な場所の問題は、領域の統治の問題でもある。現在、そのことをもっとも端的に表しているのが、移民や難民の問題であろう。グローバル化は、流動化した膨大な人々を生み出してきた。ある一定の領域を誰がどのように統治するのか。どのような状態が望ましいのかを、それを誰が決定するのか。近代と呼ばれる時代においては、国民とされてきた人々が、特権的な位置を与えられてきた。かつての大規模な移民は、国民化への過程でもあった。しかし20世紀末から21世紀にかけての膨大な人の移動は、国民国家を揺るがしてきている。いわゆる多文化主義は、多文化的状況を肯定するというよりは、国民統合の新たな政策理念として定着している。国民国家の動揺は、主権国家体制としてのウエストファリア体制の終焉でもある。場所を問題にするということは、近代の国民国家という体制そのものの問い直しの課題をも含むのである。

グローバリゼーションを国民国家が抱え込んできた課題を含むものとするならば、それは、たんに現代という時代を読み解く言葉ではない。グローバリゼーションが抱える課題を論じようとするならば、近代と呼ばれてきた時代が抱え込んできたさまざまな課題を明らかにせざるをえない。二度の世界戦争や地球的規模での環境汚染は、近代世界の帰結であり、人類の普遍的な真理と捉えてきた自由や民主主義の暴力性が明らかにされてきた。いま再び、植民地支配を含めた歴史認識やファシズムを含めた世界体制の問題性が問い直されようとしている。

現代をグローバリゼーションの時代というのは、いわゆる先進諸国の独断であり、多くの地域にとって、植民地化されたときからグローバルな枠組みのなかにおかれてきた、ということもできる。ポストコロニアルな課題は、たんに旧植民地地域の現状がかつての植民地支配の遺制、継続によって支配されているということの問題にしてきたのではない。それは、欧米諸国の国民国家形成が植民地形成と同じ過程として遂行され、現代の旧植民地が抱える課題とかつての帝国主義国と呼ばれた欧米諸国が抱える課題とが、同じ事象のポジとネガとしてある、ということの意味するのである。グローバリゼーションの課題とは、現代という時代が突きつけてきた課題と、近代という時代が抱え込んできた課題とを見据えつつ、いま私たちが直面する知の転換が何を問題にしようとしているのか、を問うことである。

グローバリゼーションを知るということは、これまでの知識に新しくひとつの知識を付け加えるというものではない。グローバリゼーションをキーワードとする研究領域は、国民国家の学として体系化された諸分野に対する批判であり、特定の課題を明らかにするというものではない。経済学や政治学、あるいは法学といった社会科学の諸分野が、国民国家の確立といかに結びついてきたのか、ということに対して自覚的になることを意味する。

もちろんグローバリゼーション研究が方法の問題に留まってよいと言っているわけではない。経済のグローバル化が、巨大企業の世界的な統合化としてどのように進められ、膨大な資金の流れが人々の生活にいかなる影響を及ぼしているのかを考えることは、不可欠の作業である。政治におけるグローバル化が、国内政治と国際政治とをどのように関連させて取り上げ、個々の装置や機構をどのように組み替えてきているのかを明らかにすることは必要である。これまでナショナルな単位で考えられてきた文化が、巨大メディアを通じてどのように生産され、個々の文化といわれるものを組み替えて、グローバル・カルチャーになったのかを考えなければならない。グローバリゼーションと呼ばれる事象の具体

的な装置と機構を明らかにすることは、きわめて重要な研究テーマである。

さらにグローバリゼーションを場所から捉え返すとすれば、この時代にいかなる行動が可能かを考えることは、もっとも緊急の課題である。正義を掲げた暴力が文明の衝突を演出し、戦争が再び紛争解決の手段として行使されている。差し迫った課題として市場主義の蔓延は、人々の生活を脅かしている。グローバリズムと呼ばれるネオリベリズムの台頭のなかで、人々がグローバルな事象に立ち向かう方法は、ますます狭まってきているように見える。グローバル資本がどのように世界を編成しているのかということを考えたときに、もはや、グローバル資本に対抗できる余地というのはほとんど残されていない。

グローバル資本はとてもなく巨大であるというだけではなく、中心性や場所性を持たず、極端な場合には無定形でフット・ルーズである。労働組合の要求が強ければ工場を他の地域に移す。環境運動などの住民運動が起これば別のところへ移動する。グローバル資本は、ますます場所的な制約から自由なフレキシビリティを獲得するようになってきており、それに対抗できる手段はほとんど残されていない。しかしこれは市場化の命令であって、個々の企業が悪者だといっているのではない。グローバルな市場化が進行しているなかで、対抗の場がきわめて限定されざるを得ないということである。勝者といわれている人々も、明日は敗者に転落する恐怖をたえず抱えている。

グローバル化への対抗手段が限定されてきたことが、世界各地での政治的無関心を引き起こしてきた一因でもあろう。立法の空洞化といったことすらいわれるようになってきているのである。世界的な現在の政治への無関心という状況は、日本だけではなく、世界的な現象である。人々にとっては、現在抱えている不安を政治化するような方向性は見えず、しかしながら社会を変革しなければならないという切迫感も感じない。選挙によって政治が変わるということに期待も持っていない。こういう状況において、いかにグローバル化への抵抗の場を見だし、政治を発見するのか、これはきわめて困難な課題である。

この課題を解く糸口のひとつは、生産の場ではなくて、まさに人々の生命や生活が再生産される場であろう。再生産の場を基盤として、どのような抵抗の場が設定できるか。私はそれを移民研究からやっていきたいと思っている。再生産にかかわるさまざまな研究領域で展開されている議論のなかで、移民が非常に大きなウェイトを占めるようになってきている。あるいは、再生産がグローバルなレベルで現れてきた、とすることができよう。

再生産は、国民国家の枠の中で完結し、国家政策の根幹に位置すると考えられてきた。それゆえに、移民は、これまで場所の浸食者ととらえられて、統治すべき対象とみなされ

てきた。移民を統治する側としての国民と統治される側としての移民の対称性が、移民に対する認識を支えてきたのである。

しかしいま移民に対する認識で問われているのは、移民を統治の対象と見てきたことである。移民との「共生」とは、共生をする側としての国民と共生される側としての移民との分割である。しかし、移民の女性化は、これまでの生産の場を越えて、再生産の場に入り込み、この分割を突き崩す動きでもある。女性移民の存在が移民研究に新しい地平をもたらし、再生産のグローバル化という新たな課題を提起してきている。移民は、移動する人々の問題ではなく、すべての人々が直面している課題を映し出しているのである。移動という観点から場所を捉え返すことは、グローバルなものの方の見方のひとつの方法である。

このシンポジウムのメインテーマは、「グローバル化の光と影」であり、その副題は、「私たちは他者とどのようにかかわるのか？」という問いかけである。移民の時代において、2億人に達する人々が、生まれた土地を離れて海外で生活をしている。さらに、生存手段を奪われた人々が世界的な規模で拡大し、歴史上、未曾有の規模で、潜在的、顕在的な移民としてある。多文化的、多民族的な状況は、今後ますます進むであろう。「他者」とされる人々との接触も避けることはできない。そこに対話の場を切り開くことは、きわめて重要である。

しかしその前に考えておくべきことがある。「私たちは他者とどのようにかかわるのか？」という問いかけである。問いかけを発するのは誰であるのか。そして誰に問いかけられているのか。問いかける側は、あらかじめ前提とされているのではないか。「われわれ」は、つねに問いかけを発する側であり、そのことが「問いかけられる側」としての「他者」を作りだしてきた。問いかける側と問いかけられる側との間には、一定の政治的な配置関係がある。

問いかける側と問いかけられる側との関係を変えていくことは、もっとも困難な課題である。しかし両者の関係を変えることによって、副題の問いかけに答えることが可能になるのであり、対話の場を作り出すことができるであろう。